令和８年５月７日

市指定史跡・須津千人塚古墳から出土した
朝鮮半島の百済にゆかりのある帯金具の調査結果について

このたび、市指定史跡・須津千人塚古墳の発掘調査で出土した金銅製品について、６世紀後半から７世紀前半頃の朝鮮半島・百済にルーツを持つ、極めて装飾性の高い帯金具（ベルトの金具）であることが判明しました。

百済特有の繊細な文様や高度な金工技術を備えた同時期の帯金具が、これほど良好な状態で確認された例は全国的になく、貴重な発見と言えます。

また、貴重な本出土品を広く皆さんにご覧いただくため、富士山かぐや姫ミュージアムにて一般公開を行います。

記

１　出土品名　　須津千人塚古墳出土　金銅製帯金具

２　員　　数　　３点（帯先金具１点、銙板[1]２点）

３　出 土 地　　富士市神谷 846-3（須津千人塚古墳石室内）

４　経　　緯　　市指定史跡である須津千人塚古墳の整備工事に伴い、令和６年度に実施した発掘調査で出土した金属製品について、令和７年度に静岡県埋蔵文化財センターで保存処理[2]を行った結果、新たに本資料の内容が明らかになった。

なお、現地の古墳と石室については令和７年度に整備工事が完了し、現在、一般公開を行っている。

５　特　　徴　　いずれの出土品にも、蹴り彫りや毛彫り彫金[3]による極めて精緻な文様が認められる。帯先金具（別紙：写真 1）には、上部に古代中国で仙人の住む山として知られる三神山（蓬莱山・方丈山・瀛州山）と、宝珠形に向かい合う２羽の鳳凰が表現され、中央から下部には、口を開いた鬼神（鬼面）が雲気や唐草文を伴って意匠化されている。

また、円環の付く銙板（別紙：写真2・3）には、三神山を想起させる唐草文や光芒文が流れるような筆致で施文され、いずれも卓越した金工技術を示すものと言える。

6　意　　義

＜要　点＞

① ６世紀後半から７世紀前半の百済の技術者が制作した可能性が高い、現状では国内唯一の金銅製帯金具である。

② 同時期の東アジアの仏教文化や国際情勢を考えるための基礎資料となる。

③ 聖徳太子の一族と本地域との関わりがうかがえる。

＜解　説＞

本出土品は、国内に明確な類例は見られないものの、その形態はサビ期百済[4]において官人の身分を示した帯金具と多くの共通点を有している。高度な彫金技術のほか、三神山・鬼神などを表す文様構成からも、百済系の技術者によって制作された帯金具である可能性が高いと考えられる。

須津千人塚古墳の被葬者が活躍した７世紀前半から中頃には、推古天皇の摂政であった聖徳太子（厩戸王）によって法隆寺が建立され、鞍作鳥[5]をはじめとする百済系の技術者集団が倭王権の中枢で活躍し、造仏や馬具生産、繊維工芸などが発達した。法隆寺献納宝物（東京国立博物館蔵）には、本資料と共通する鳳凰や鬼神、宝珠文を施した錦（紋織物）が複数伝来しており、飛鳥時代の文化的背景を示す貴重な資料となっている。

また、文献史学および近年の考古学的知見によれば、須津千人塚古墳が所在する駿河東部地域には、聖徳太子の一族である上宮王家が管掌した壬生部や膳大伴部などの集団が数多く居住していたと考えられている。

したがって、本出土品は須津千人塚古墳の被葬者が上宮王家との関係性の中で入手した品であった可能性が高く、また６・７世紀の国際情勢や各国間の政治・文化的交流の実態を考える上でも極めて重要な出土品として位置付けることができる。

7　今回の成果　本地域の歴史にとどまらず、古墳・飛鳥時代の国際交流や、国内に仏教美術を伝えた技術者集団の活動を考える上でも重要な意味を持っている。

そして、須津千人塚古墳に眠る人物が、当時の政治的・文化的ネットワークの中でいかなる立場にあったのかを解き明かす鍵となるものとなる。

8　一般公開　と　き／５月９日（土）から５月 24 日（日）まで

ところ／富士山かぐや姫ミュージアム展示室１

※９日（土）と 24 日（日）は、13 時から文化財課職員による「ミュージアムトーク」も行います。

用語解説

（1）　帯の表面に貼り並べられた装飾板。

（2）　出土品に付着したサビや泥を除去した後に、防錆処理や強化処理を行い、破片の接合や修復作業を行うこと。

（3）　蹴り彫りは鏨（たがね）を斜めに打ち、小さな三角形の連続によって文様を表現する技法。毛彫りは、鏨を用いて金属の表面を削り取ることで、髪の毛のような細く繊細な線を彫る技法。

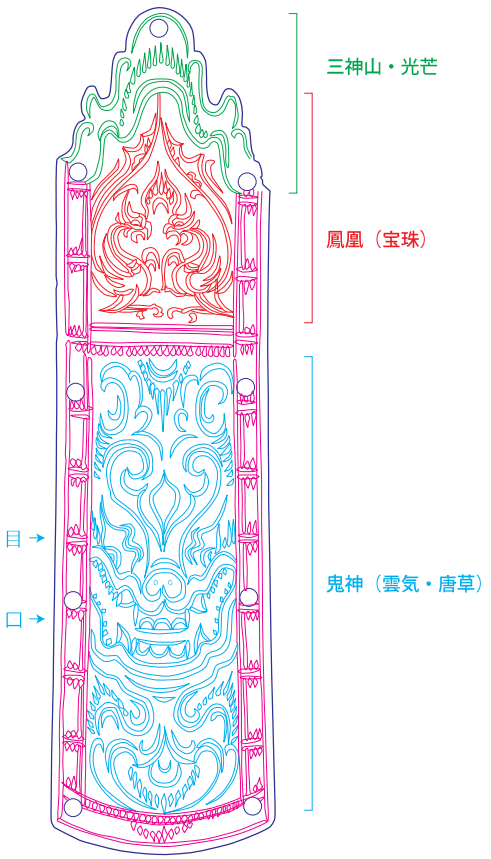
（4）　古代朝鮮三国の百済が、最後の首都（現在の忠清南道扶余郡）を拠点とした、538 年から 660 年にかけての時代を指す。「泗沘期百済」とも表記される。

（5）　日本最初の本格的寺院である飛鳥寺の釈迦如来像（飛鳥大仏）のほか、法隆寺金堂の釈迦三尊像を制作したことで知られる、飛鳥時代を代表する仏師。近年は鞍作氏が金工に限らず、皮革加工や繊維工芸にも長けていたことが注目されている。「鞍作止利」とも表記される。

問合せ　富士市教育委員会文化財課 文化財活用担当
担当／佐藤・藤村・竹村
電話／0545-22-2095　　FAX／0545-22-2096
e-mail／ky-bunkazai@div.city.fuji.shizuoka.jp

写真 1

表面



（表面文様模式図）

裏面

写真 2

表面

（表面文様模式図）

裏面

写真 3

表面

裏面

（表面文様模式図）

0　1:1　3cm

※文様の解釈は報道提供時のもの

今回確認された須津千人塚古墳の金銅製帯金具と文様の内容

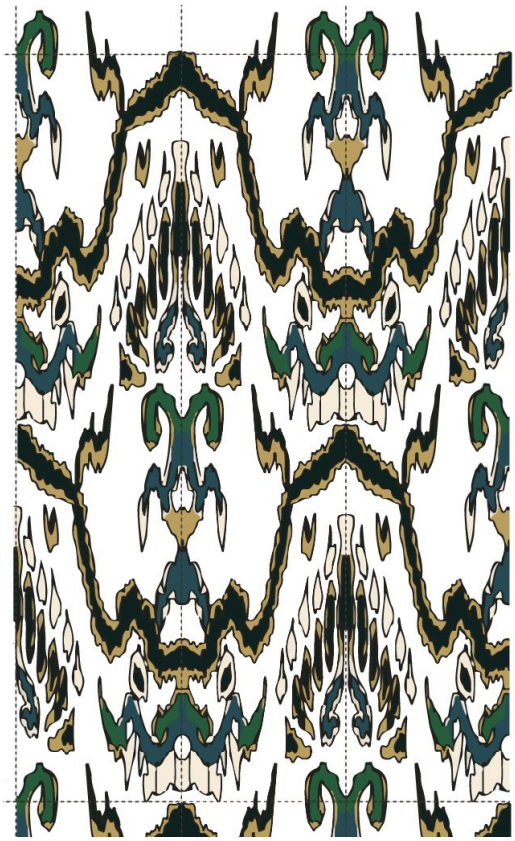
今回確認された須津千人塚古墳の金銅製帯金具（集合）

須津千人塚古墳の帯金具や文様を考える上で参考となる資料

１．朝鮮三国時代の帯金具の例（東京国立博物館蔵：金・銀製帯金具／６世紀）

２．帯を着用した鬼神が描かれたタイル〔韓国･扶余 窺岩面〕
（東京国立博物館蔵：蓮花鬼神文磚／７世紀）

４．三神山が表現された冠装飾〔韓国・扶余 陵山里中上塚〕
（韓国・国立中央博物館蔵：金銅透彫金具／６～７世紀）



３．鬼神（獅子）や宝珠文、唐草文が意匠化された錦
※復元図（原資料　東京国立博物館蔵：法隆寺献納宝物・
赤地獅嚙火焔宝珠入雲気繋文経絣／７世紀）

５．三神山が表現された木棺の装飾金具（韓国・益山 双陵）
（韓国・国立中央博物館蔵：金銅棺装飾／７世紀）

【画像の出典】　１・２：ColBase (https://colbase.nich.go.jp)
３　：東京国立博物館 2025『染織２ 錦』法隆寺献納宝物特別調査概報 44 掲載図を一部加工
４・５：国立中央博物館 HP

富士市報道提供資料

富士市指定史跡

須津千人塚古墳の概要

須津古墳群のなかの千人塚古墳

千人塚古墳は、飛鳥時代（7 世紀中頃）に駿河湾の奥部にそびえる愛鷹山南麓に築かれた、横穴式石室を有する古墳です。千人塚古墳のすぐ西側を流れる須津川の一帯には、総数 200 基を数える須津古墳群が展開しており、当古墳は特に東岸の支群の中核をなすものであるとの理由から、まず昭和 51 年（1976）に地表に残る墳丘と石室部分が市の史跡に指定されました。その後の発掘調査を経て、令和 6 年（2024）6 月には地表下に残る周溝部分のほか、近接して築かれた 3 基の横穴式石室墳を加えた範囲が追加指定されています。富士市では同年 7 月から整備工事を実施し、令和 7 年（2025）11 月 1 日には（一社）須津地区まちづくり協議会との共催にて整備完成記念イベント「古代から未来へ」を開催し、一般公開に至りました。

飛鳥時代のスルガを代表する横穴式石室と副葬品

指定後の発掘調査により、千人塚古墳は幅約 3 mの周溝を有する直径約 21 mの円墳と判明しました。また、埋葬施設は静岡県東部では最大級となる全長 11.5 m、中央部幅 2.05 m、石室高 2.35m の無袖形横穴式石室であり、石室内には礫敷きによる床面上に組合式箱形石棺 3 基と屍床 1 基を設置することで、最低 4 回の埋葬がおこなわれたとみられます。

石室内の調査では、金銅製飾金具、丸玉、大刀、金銅製刀装具、鉄鏃、弓金具、砥石、鎌、刀子、馬具、銅鋺、土器などの遺物が出土しています。3 組の馬具のうち、1 組は帯金具等に飛鳥時代の仏像装飾と関係のある意匠が毛彫文によって施された大変希少なものです。また 2024 年の調査では、流麗な唐草文で彩られた装身具の一部とみられる飾金具も出土しており、これらは被葬者と倭王権との深い関係性を示す資料といえます。

死後も主を支える小円墳群

千人塚古墳の背後に立地する径 10 m前後の小円墳は、いずれも 7 世紀前半から後半にかけて築造されたものです。これらの古墳には、その立地や石室規模、副葬品の内容などから、千人塚古墳の首長の下で地域経営を支えた、ほぼ同世代の集団が眠っていると考えられます。現在も残る古墳群の景観によって、生前の社会関係が表現されているとみてよいでしょう。

文化財保存活用区域の拠点史跡として

富士市の須津地区は、文化財保存活用地域計画において、多様な文化財が集中する文化的空間の創出を目指す地区（文化財保存活用区域）に認定しています。須津古墳群では、市と地区との共催により、これまでにも継続的に文化財関連イベントを実施していますが、千人塚古墳の公開後はさらに利活用を図っていく予定ですので、今後の展開にもご期待ください。

▲千人塚古墳の横穴式石室内部（整備後）

▲整備完成状況（南から）

▲千人塚古墳を中心とする古墳群の群集イメージ